

## 9. 建築物

### 9-3. 家屋の内部構造

#### 9-3-1. 屋内とその配置

新平賀では、ほとんどがアイヌ風の段葺きのカヤ葺きの家で、自分が小学校を卒業したあと農家に奉公に行っていた17歳の時にコタンではじめて本葺き（昔はサット引きといった）の家が建てられた。その家が私の家だった。土台つきの家で板床でドアがあつた。

煙だしの空窓は、三角形の窓で、そこから吹き込んだ雪が一寸くらいたまることがあつた。母親がその雪をはねていた思い出がある。壁の板は全部一重だから、そっくり返って下から雪が吹き込む。そのせいで焚火の煙が片方に行く。だからトマ toma（ゴザ）で煙よけを作つた。

モセム mosem（下屋）は、母屋に突き出していて、ほんとうの差し掛けで片屋根だ。端には壁がある。4面に壁がある。モセムにも入口（モセム アパ mosem apa）があつている。モセムから母屋への入口もアパ apa という。モセムは母屋の奥行きより少し短い。モセムの入口は南側すなわち海に向いている。南の壁にはイトムンプヤル itomunpuyar がある。東向きには、ロルンプヤル rorunpuyar がある。

屋根の頂上は、カヤをシナの木の皮によつた紐（ニペシ nipes）で縛って互い違いに置き、その上にもう一つ葺き上げてきたカヤに直角になるようにカヤを載せて縛ってしまう。

シントコなどを置いておく場所は、幅3尺で長さ4～5尺くらいの板を敷いて高さ20cmくらいの壇になっている。この場所をイヨイキリ iyoykir（宝檀）という。人の目の高さくらいの高さにひもで棚が吊つてあつた。昔は、棒をひもで吊つて棚（サン san）としたが、わしの時代には幅30cmくらいの板をひもで吊つて棚とした。この棚には、特に宝物である刀、タマサイ（tamasay 首飾り）、イカユブ（ikayup 矢筒）などを箱（スウオブ suwop）に入れて棚にのせて置く。宝物は、カムイノミ以外の時には、箱に入れてしまつて置くものだ。

[門別 鍋沢強巳氏]

#### 9-3-2. 炉とその周辺

いろりをアペオイ apeoy という。炉縁木をイヌンベ inunpe、炉内の上手の両隅にあるどんころ（丸太）をイヌンペサウシペ inunpesauspe という。下手の炉縁木は、ある場合とない場合がある。

コタンコロクル kotan kor kur（首長）の家は大きく作つてある。何十人も入る。一晩中歌つて踊っている。

炉縁に座る時には、家の主人が入口から見て左の座（オシソン osison）の上手に座り、下

手に妻が座る。右の座の方には女達が座る。カムイノミのとき男達が座るのは、上座でロッタ rotta という。

火棚のことは、トゥナ tuna という。アワやヒエを干すので火棚のスダレは間隔を小さくして編む。干せたヒエやアワは、石の挽臼でひく。子供が石臼ひきをさせられた。2年生くらいになるとイウタ iuta (もち用の粉つき) もさせられた。

[門別 鍋沢強巳氏]

#### 9-4. 屋外の構造

便所(ルー ru)は、家から北西に5 mくらい離れている。一つを仕切って男女別(オクカヨ ルー okkayo ru、メノコ ルー menoko ru という)にしている。北寄りの山側が女便所で、南側の海側が男便所である。入口は東南向きで男女別々の入口である。下の便壺は男女共用で一つである。便所より浜側で家から10 mぐらい離れたところにごみ捨て場(ムンク タウシ munkutausi)がある。掃いたゴミ、灰とか芥(あく)とかを捨てる。芥(あく)捨て場 murkutausiは、家から4~5間離れている。イナウチパ inawcipa(祭壇)の中央の前である。倉庫(プー pu)は、家の南にあり、家から5間くらい離れている。倉庫は一つだけで、イトムンプヤル(itomunpuyar 南窓)の向い側、東南に入口が向いていた。入口に梯子(ニカル nikar)は、皮を剥いたどんころ(丸太)に刻みをつけたものだった。梯子は、倉庫に入るときのみかける。梯子を架けたままにしておくとネズミが上ってしまうからだ。自分の世代では、倉庫のある家は一軒だけしかなかった。鍋沢ウセンカタの家だけだった。

クマを預かる家は一軒しか知らない。そこにクマ檻があつた。

旭川のキリスト教の教会の留守番に行つて一冬暮らしたときに、近文の砂沢市太郎さんが自分の家族の者と一緒に留萌の山奥に行つてクマを何頭かとして仔グマを2頭連れて帰つてきた。市太郎さんが兄貴と呼ぶ私の父に一頭もつていけやと言つてくれたので仔グマ(ポン ヘペル pon heper)を一頭もらつて来た。

自分の家ではクマを飼わず、おじさん(父元蔵の母である孫ばあさんの弟の平賀サンロカ)の家で飼つた。おじさんの家には、家から4~5間離れたところにクマ檻(ヘペル セツ heper set)があつた。イトムンプヤル(南窓)から見て下手にあつた。食器の差入れ口も東南を向いていた。

イトムンプヤルのすぐ前にオニガヤのスダレ(イサツケキ isatkeki)で作つた魚を干す物干し台(イサツケニ isatkeni)があつた。5尺くらいの高さの又の木で2間くらいの長さの棒を渡す。その上にスダレを置く。スダレは干すものがたくさんある時は何枚も使つた。スダレの幅は、2.5尺から3尺くらい。オニガヤは竹みたいなものなので5~6寸くらいの間隔で編んであり、丈夫だ。

家から200 mくらい離れたところに掘り井戸があつた。井戸は共同で使つていたのだが、その井戸の水が枯れたので隣の家に水をもらいに行くことがあつた。近くにシラウ(siraw「あ

ぶ) 沢という川があつたが遠いので井戸を掘った。

シウンコツでは、井戸が枯れると、小川の水を使つた。何度も水汲みに行くのがたいへんだつた。風呂にはいるときには、4斗樽を何個か馬車に積んで運ばなければいけなかつた。シウンコツは低いところにあるので井戸もすぐに枯れてしまうので、飲み水も運ばなければならない。家の裏にふた抱えもある木があつたのに畑にするために切つてしまい、井戸の水が枯れてしまった。井戸(シムプイ simpuy)は、ワッカウシカムイ(wakka us kamuy 水の神)だ。

昔、シウンコツの高台に住んでいた時には湧き水(ナムワッカ nam wakka)を汲んでいた。1kmくらい離れた三角山のところの湧き水を汲みに行った。5~6歳の頃、姉と水汲みに行った。上に浮かんでいる氷を手でつかむ気になって、1mくらいの深さの杵木の中に入ってしまったことがある。姉が足を引っ張りあげてくれなかつたら死んでしまうところだつた。その湧き水は今のケンタッキー・ファームのところにある川に流れ込んでいた。(湧き水を mem というところもあるが、との問に対して)、MEM mem は「涼しい」という意味で、湧き水という意味はない。シウンコツの崖の下は、沙流川だ。ウヨツペ沢の意味は分からない。

イナウチパ inawcipa(祭壇)は、ロルンプヤル rorunpuyar(神窓)から3間くらい離れている。祭壇は一列のみだ。幅は1間半くらいで、高さは2尺5寸くらいである。横棒を又木(まつかの木)に載せてある。

祭壇に捧げるイナウには、いくつかの種類がある。

キケチノイエ kikecinoye は、一番最高のイナウで、何本も立っていた。下の方がふさになっている。何本かのキケ kike(削りかけ)をねじって束にし、さらにそれらをまとめて下の方でキケでしばる。その下に脚をつける。

キケパルセイナウ kikeparse inaw というのはふさふさになっていない。キケパルセイナウはあまり偉くないイナウである。2つのイナウは高さが同じである。キケパルセイナウは、人の背の高さと同じくらいである。途中で横棒に縛って倒れないようにする。

チェホルカケブ cehorkakepには、脚をつけない。逆さに削るからその名がついた。ちょっとした時に使う。シンヌラパ sinnurappa(先祖供養)の時に使う。

ストウイナウ sutuinaw という、上から下へ4列交互に刻み目を入れたイナウもある。

[門別 鍋沢強巳氏]

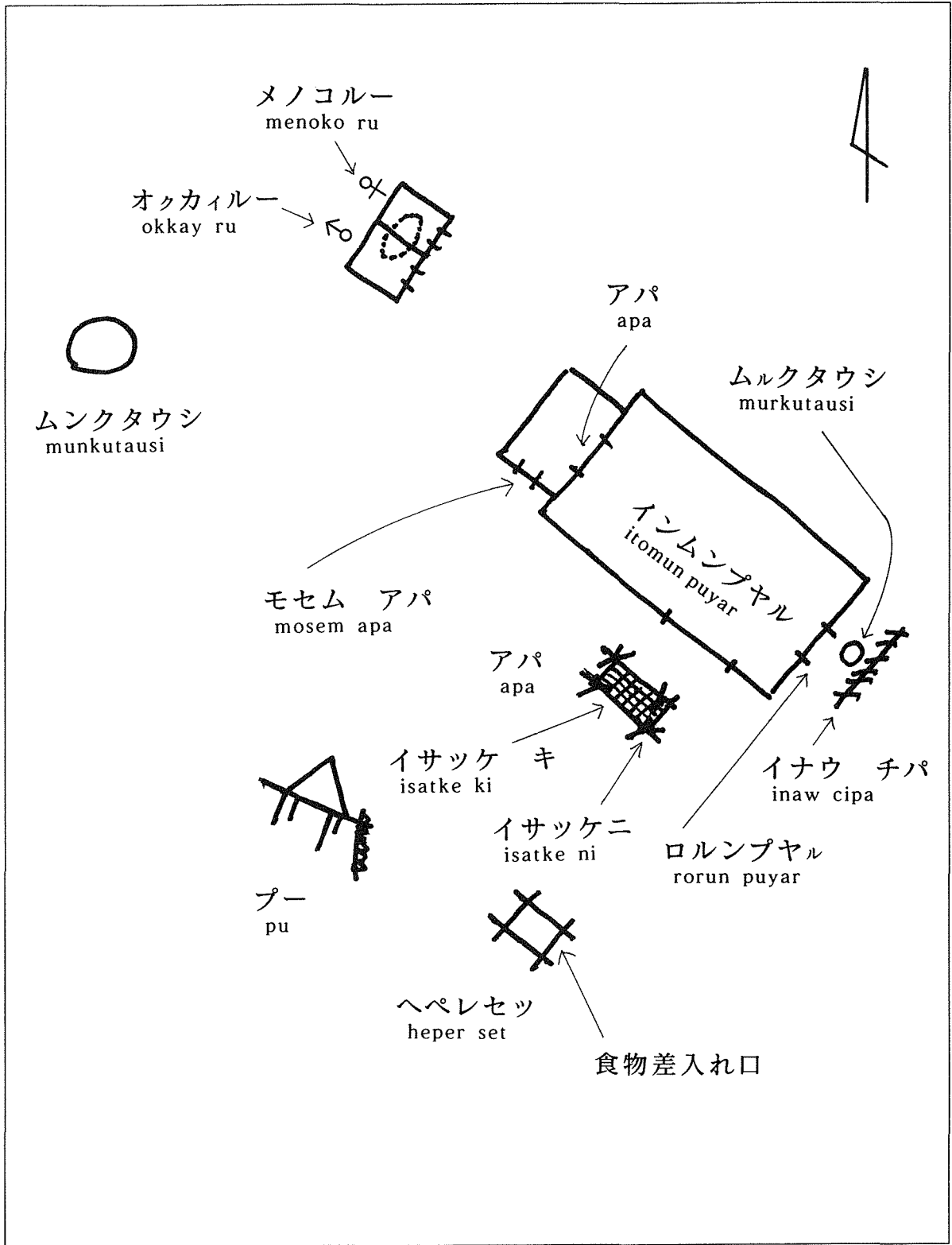


図1. 新平賀の住居とその周辺